加藤清正の実像

Kato Kiyomasa

天正17年(1589)、清正とともに肥後を分割統治していた小西行長の領地で、一揆が起こります。天草一揆です。この一揆鎮圧をめぐって対立したと言われる清正と行長。果たして、その真相はいかに。

〈11〉天草攻め

清正が領主に就任した翌年の天正17年、天草で一揆が起こります。天草は、肥後の南半分を治める小西行長の領地でしたが、以前から有力な在地勢力が存在していました。天草氏、大矢野氏、上津浦氏、志岐氏、栖本氏のいわゆる「天草五人衆」です。行長の領主就任に伴い、彼らは行長の配下となるように秀吉から命じられていましたが、それに従わず、行長との溝は次第に深くなっていきました。一般的には、行長が居城・宇土城を築く際に負担を課したところ、それに応じなかったことが、天草攻めの原因と言われています。しかし、彼らの態度は、行長個人というより、豊臣政権に向けられた不信任と捉えるべきでしょう。そのため、行長は豊臣政権の威信をかけて一揆を鎮圧しなければならず、10月に自ら軍勢を率いて天草へ渡海します。近隣大名の援軍を得た行長軍は、11月8日に一揆の中心人物・志岐麟泉を降伏させて志岐城を落とし、25日には天草種元が籠城する本渡城を制圧して、苦戦しながらも一揆の鎮圧に成功します。豊臣政権の面目は何とか保たれました。

では、この天草攻めに清正はどう関わったのでしょうか。清正も一揆鎮圧軍の一翼として天草へ乗り込みます。行長領・天草で起きた一揆だからと言って、清正の立場上、決して対岸の火事では済まされません。なぜなら清正は、秀吉から再三にわたり「何事も行長と相談して肥後を治めよ」と言われているため、清正の連帯責任も問われかねません。

これまで、天草攻めについては、戦下手な行長が一揆勢に手を焼き、清正に援軍を要請して、戦に長けた清正の力を借りて何とか一揆を鎮圧したと両者が対比的に描かれてきました。しかし、当時の史料を読む限り、真相は少し違うようです。行長が清正に援軍を求めたことは確かですが、それは清正配下の軍勢を天草に差し向けて欲しいというもので、清正自身の出陣は拒否しているのです。この理由について行長は、秀吉への書状の中で「2人揃って居城を留守にすることは、秀吉様の命令に反するため、清正自身の渡海は思い留まらせた」と述べています。

しかし、清正は半ば強引に天草へ渡海します。清正が行長の軍事力を心許なく思っていた節もありますが、実はこの出陣は清正の必死さの表れだったのです。清正の置かれている状況を考えてみましょう。前にも述べたように、天草は行長の領地ですが、秀吉に「何事も2人相談して肥後を治めよ」と釘を刺されていますので、清正にとって天草一揆は決して他人事ではないのです。しかも清正自身、大軍を率いての戦は意外にも今回が初めてですので、「戦下手の行長の加勢に行ってやる」などと、そんな余裕など清正にはなかったと思われます。前領主・佐々成政切腹の原因となった2年前の国衆一揆もまだ記憶に新しいはずです。実は、行長だけではなく清正も絶対に失敗が許されない切羽詰った状況に置かれていたのです。

このように、天草攻めに対するこれまでの見方は少し修正する必要がありそうです。後世書かれた伝記や小説などで2人の不仲がよく強調されますが、はじめから仲が悪かったわけではなく、秀吉に「相談して肥後を治めよ」と厳命されている以上、2人は協力して事態に対処しなければなりません。2人は一揆を鎮圧するという1つの目的を達成するため、それぞれの立場や考えで動いたわけですが、この時のお互いの行動が、その後の両者の関係に微妙な溝を生じさせたのでしょう。新米領主の2人は、この段階ではまだ運命共同体だったと言えるかもしれません。



このコーナーは、大浪 和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。